

深い考察独歩に匹敵

文人の 武蔵野

並木仙太郎は、太古より武蔵野は関東八州に一大広野をなす武蔵野原であったが、今（大正期）の武蔵野の中心は小金井にあると喝破しました。それは明快な主張でした。

並木の「武蔵野」（民友社）の目次は、「武蔵野」「仙境小金井」「小金井以東」「小金井以北」「小金井以西」「小金井以南の風光」「小金井以南の史蹟」「武蔵野奇聞」「古歌に現はれたる武蔵野」です。

並木仙太郎 ③



小金井は、武蔵野の中心？
（小金井市役所で）

ので、著書自体が小金井を中心に構成されています。

「泥んや小金井の四時殊に景物多く、春花秋草の見るべきもの、今も尚少ながらざるをや」と述べ、小金井を「仙境」と呼び、そこに「真趣味」を見いだしました。

並木の生い立ち、出生地などはわかっていないのですが、その文章は故郷万歳という讃歌の類ではなく、格調高い風土記のようです。明治期を代表する国木田独歩の「武蔵野」に対抗できる、大正期の「武蔵野」と呼べるのではないかと私には思われます。

並木は、徳富蘇峰（1863～1957年）の秘書でした。蘇峰は、独歩が「武蔵野」を連載した月刊誌「国民之友」を主宰していた言論人です。独歩の「武蔵野」を最初に刊行したのも、蘇峰が設立した言論団体である民友社でした。

た。そして、並木の「武蔵野」を刊行したのも同じ民友社でした。蘇峰もまた、武蔵野の「風光」「野趣」を愛し、小金井に注目していました。

並木の「武蔵野」は、独歩の「武蔵野」よりもはるかに大部ですので、簡単に比べることはできませんが、より深く、より広く、より明快に武蔵野を考察しています。

次回以降は、並木によって武蔵野の中の武蔵野と認定された「小金井」について、文学との関わりを中心に述べていきたいと思えます。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

